

4月4日 受難の主日

イザ 50:4〜7 フィリ 2:6〜11 ルカ 23:1〜49

1. フィリ

vv.7-8 「人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

“へりくだり”と“従順”は、私たちの主イエス・キリストの受難を解釈するための鍵となるような言葉です。初期のキリスト教の賛美歌の中で、この二つの言葉が歌われました。それはキリストへの賛歌であり、キリストの福音への信仰宣言であります。

主の受難と復活を的確に理解すること、信じて告白することの大切さを思って、私たちはこの二つの言葉に耳を傾けます。なぜなら、謙遜と従順はキリスト教の美德の一つのように思われていますが、それは神の子イエス・キリスト御自身のへりくだりと従順に固く根ざしているからです。

2. イザ

主イエス・キリストは、イザヤ書の中で歌われている“主の僕”となるために、神の子でありながら“へりくだって”人間の姿になって現れました。受難と復活を通して“主の僕”の使命を貫き通すために、父なる神に“従順に”従われました。

「ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。」(イペト 2:23-24)

このような使徒の教えによって、私たちはイザヤ書の“主の僕”の意味を理解することが出来ます。“へりくだりと従順”は、決して単なる美德ではなくて、私たちを救う神の恵み、受肉された神の子の御業そのものであります。

「彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに(神との)平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」(“僕の歌 4”イザ 53:5)

3. ルカ

受難の主日のミサでは通常、司式司祭と第一第二朗読者、それに会衆も加わって、主の受難の物語りを交唱します。そこで私たち会衆が唱えるのが群衆の言葉の部分であることには、大きな意味があります。それらは私たちの神への背きとキリストを十字架につけた罪の言葉だからです。神の子を十字架につけたのは、外ならぬ私たち自身であったことを、会衆はこの交唱によって再び味わいます。

2004年4月(主日C年)

ピラトを犯人に仕立て上げることも、当時のユダヤ人にイエス殺しの罪責を負わせることも、聖書の意図ではありませんでした。主の受難の物語りが教会で朗読されるごとに、私たち会衆は、神の子が私たちに代わって裁きを受け、私たちの罪を担って十字架に死んでくださったことを理解するのです。

父なる神は御子を十字架の上に打ち砕くことを望まれ、御子は自ら進んで御自分をいけにえの献げ物とされました(イザ 53:10 参照)。

「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ 4:25)

受難に続く復活の勝利に、目を向けましょう。

アーメン。

4月11日 復活の主日

使 10:34~43 コロ 3:1~4 ヨハ 20:1~9

1. コロ

vv.1,3-4 「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。……あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

復活の主日は、洗礼の秘跡によって教会に加え入れられたすべての人々の喜びの祝いです。キリストは私たちの罪のために死んで葬られ、私たちに罪の赦しを得させるために三日目に復活させられたからです。

洗礼は私たちがキリストの死と復活に与らせる秘跡で、私たちはキリストと共に復活させられたのですから、永遠の命(来るべき世の命)をいただいており、終わりの日にキリストと共に神の国に復活することになります。

私たちにとっては今は復活は約束の形で与えられていて、その実現は将来のことではありますが、キリストはすでに初穂として、私たちすべてのキリスト者に先立って復活して天に昇り、父なる神の右の座に着いておられます。この天上のキリストが、司祭を用いてミサの中で私たちに会ってくださり、御自身のいけにえの奉献に私たち会衆の奉献を一つに結んでくださいます。

2. 使

使徒たちが宣教したイエス・キリストは、生きている者と死んだ者を裁くために(終わりの日に)来られる審判者としての救い主でありました。「この方を信じる者は誰でもその名によって罪の赦しを受けられる」(v.43) そのような審判者を、代々の教会は信じて来たのです。

私たちの人生は死で終わってしまうのではなくて、その後に裁きを受けることが定まっております(ヘブ 9:27)、その日には、私たちのためにすでに十字架にかかって私たちの罪を担ってくださったキリストが、私たちの審判者として現れてくださるのです。

この復活のキリストを伝える使徒たちの宣教に、全世界の教会は今朝再び耳を傾けています。あなたも、私も、共に耳を傾ける会衆の中において、ミサを通して復活のキリストにお会いしていることを、感謝しましょう。聖霊が私たちの心の内を照らして、神の秘められた計画を悟らせてくださいますように。

3. ヨハ

事件からすでに半世紀以上を経て、ヨハネ福音書は教会の信仰の基礎であり出発点であるイエスの復活についての説明を、このように語りました。

4月18日 復活節第2主日

使 5:12~16 黙 1:9~19 ヨハ 20:19~31

1. ヨハ

v.21 「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

教会の歴史は、復活のイエスによる使徒たちの派遣から始まりました。私たちキリスト者が歩んでいる現代という時代は、“イエスの生涯”から“教会の時代”へという決定的な移行をその出発点としていることに注目しましょう。この教会の時代は、使徒たちの宣教を土台として建てられており(エフェ2:20)、復活のイエスは教会の宣教を通してその御業を継続しておられます。

キリスト教とは何かという質問に対して、多くの人々がそれはナザレのイエスが信じ、教え、実行した宗教であると考えて来ました。そこではイエスの宗教の再現、あるいはその現代における模倣のようなものが漠然と考えられており、聖書の中の四つの福音書がすべて復活のイエスによる使徒たちの派遣命令で締めくくられていることが見落とされて来ました。しかし私たちは今朝、非常に重要な聖書の証言を聞かされているのです。

v.31 「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」

キリスト教は、使徒たちの宣教から始まりました。イエスの生涯と死と復活は神の偉大な御業であって、人はそれによって贖いと罪の赦しを受けることが出来るという福音を、使徒たちは復活の主に委ねられたことを理解しました。彼らの福音はイエス・キリストについての福音、救いの福音であって、決してナザレのイエスの宗教の再現ではありませんでした。

w.22-23 「そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。“聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。”」

宣教に欠くことの出来ない決定的な要素は、この救いの御業の証人としての使徒たちであることを、私たちは聖書から学ぶことが出来ます。そして歴史の教会が今日に至るまで続けて来た宣教は、この使徒たちの宣教の継続以外の何ものでもありませんでした。使徒たちの宣教から離れては、キリストの福音は決して存在し得ないからです(ガラ1:8 参照)。

2. 使

原始教会において使徒たちが多くのしるしと奇跡を行い、病人や汚れた霊に悩まされている人々をいやしたという聖書の記事は、使徒と呼ばれた人々と後の時代の教会の指導者たちとの明確な区別を私たちに教えてくれます。使徒たちが行った業は、イエス御自身の御業でありました。イエスは復活して、使徒たちの中に、使徒たちを通してその御業を継続されたのです。使徒たちはそのために聖霊を受け、イエス御自身の権威である罪の赦しの権威を委ねられました。聖書は、その使徒たちの証言を保存し伝えるために、

教会によって編集された書物であって、後の時代に書かれたすべてのキリスト教文書に対して独特の“聖なる書物群”としての位置を保っています。

教会は現代に至るまで、この使徒たちの宣教を継続するために、使徒の後継者である司教たちを叙階して来ました。誤解してならないのは、後の時代の教会は司教たちの教会になったのではなくて、司教たちの奉仕によって使徒たちの教会、従って復活されたイエス・キリスト御自身の教会であり続けて来たということです。司教たちは使徒の後継者であって、使徒自身ではありません。そして司教の奉仕を通して現代の教会で継続されているのは、使徒たちの宣教であり、従ってそれは復活された主イエス御自身の御業なのです。

3. 黙

w.17-18 「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。」

教会で神のことばの宣教が継続されるとき、そこには死と陰府の鍵を持った復活のキリストが共におられることを、聖書は語ります。黙示録の著者ヨハネが、近代の聖書学によれば使徒ヨハネとは別人であるとしても、それでもこれは“神の言葉とイエスの証し”(1:2)を復活の主によって委ねられた(使徒的な)書物であると2世紀の教会が理解したために、新約聖書の中にその最後の文書として含められました。その著者であるヨハネがパトモス島に逃れて、そこで故郷の町の教会でささげられているミサのことを黙想していたとき、復活のキリストは彼に語りかけて、それが天上における最後の完成の先取りであることを(v.19)、地上のミサは天上のミサを前もって味わいこれに参加することであることを(典礼憲章8)示されたのでした。

復活のキリストは、使徒たちの宣教が継続されている現代の教会と共におられます。そしてその宣教は、「すぐにも起こるはずの」(1:1)神の国の宣教です。

「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」(ヨハ 20:27)

ハレルヤ、アーメン。

4月25日 復活節第3主日

使 5:27~41 黙 5:11~14 ヨハ 21:1~19

1. 使

復活のキリストは、御自分の証人である使徒たちと共におられます。キリストは使徒たちの宣教と共におられ、宣教によって救いに入れられた人々の群である教会と共におられます。

私たちキリスト者は、使徒たちの証言、使徒たちの宣教とは別の源泉から福音を見つけだしたり考え出したりすることは出来ません。「ほかの福音」(ガラ 1:6-7) を考え出そうとする人々に対して、使徒パウロは厳しく警告して言いました。「わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。」(ガラ 1:8)

使徒ペトロは、その使徒たち一同の代表者であり、原始教会の偉大な牧者でありました。教会はこのペトロを土台として建てられたと教えられています(マタ 16:18-19)。このように、使徒たちの宣教から離れては救いはなく、キリストとの交わりも存在しないことを知りましょう。

v.32 「わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証ししておられます。」

2. ヨハ

使徒ペトロは先に殉教し、使徒たちの中で最も年少であったヨハネもついに死んだ後に、この 21 章がヨハネ福音書に付け加えられました。恐らくこの二人の使徒(21:1-9 参照)に注目することが、教会と聖書への信頼を強めることに有益であったからと思われる。

復活のイエスはペトロに「わたしを愛しているか」と三回言われ、それを肯定するペトロに「わたしの羊を飼いなさい」と三回言われます。そして彼の殉教を予告されました。

vv.18-19 「“はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。”ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。」

ここでは使徒ペトロがどこで死んだかではなくて、彼が殉教という仕方でも復活のキリストの証人としての生涯を全うしたことが主題となっています。使徒ペトロの殉教は、彼が教会の土台となったことを初代教会の人々に理解させるものでありました。

イエスの愛しておられた弟子ヨハネも、主の復活の証人でありました。彼はペトロのような殉教者ではありませんでしたが、ヨハネ福音書が彼に由来するという仕方でも(21:24)、キリストの再臨の日に至るまで聖書を通して語り続ける証人となりました。

現代のキリスト者である私たちが、復活のキリストと使徒たちの宣教に由来する、教会の伝承と聖書の使信に、正しく信頼することを学ぶなら、現代の教会は「生きていると言える」(1テサ 3:8) ようになります。

3. 黙

地上のミサは、天上でささげられている復活のキリストのミサに、終末の完成を先取りする形で今すでに関わっていることを、黙示録の著者ヨハネは示されました。彼は霊に満たされて天に上り、その見たこと、今後起こるはずのことを書き留めました(1:2,19)。

「万の数万倍、千の数千倍」の天使たちが「屠られた小羊」にささげる賛美の声が響き渡ると、それに合わせて地上の教会の会衆がささげる賛美も聞こえて来ました。

v.13 「王座に座っておられる方と小羊とに、賛美、誉れ、栄光、そして権力が、世々限りなくありますように。」

使徒たちの宣教は、キリストの再臨と神の国の完成に至る「秘められた計画」(ロマ 16:25) を啓示するものです。復活のキリストは私たちのささげるミサの中で、その時その場所で奉仕する司祭たちと共にいて、使徒たちの宣教を現代に継続させていただきます。

「あなたの子どもとなる恵みを受けたわたしたちが、感謝のうちに救いの完成を待ち望むことができますように。」(今朝の各年共通用集会祈願)

ハレルヤ、アーメン。